



第 66 回 「異星人伝説」の言葉

G. マルクス著、森田常夫編訳、「異星人伝説」（副題：20 世紀を創ったハンガリー人）（日本評論社、2001 年 12 月）ではその副題にあるように、20 世紀にハンガリーから多くの優れた科学者が世界に送り出された理由を解説しています。これは 3 部からなっており、各々以下のように記されています。

【第 1 部】

彼らの業績が傑出し人間離れしている印象を与えることからハンガリー科学者の異星人伝説が生まれましたが、ここではその背景を分析しています。また、上記の何人かは首都ブダペストの同じ街区で生まれていることから、異星人を乗せた宇宙船がこの近辺に軟着陸したとの説もあるそうです。欧州の他国語にくらべ、ハンガリーの言葉は不可思議だそうですが（その文法は日本語のそれに似ています）、これも異星人伝説の根拠の一つとなっているそうです。

なお、分析の結果の要点は次のとおりです。

【歴史的混乱】ハンガリーは地理的な偶然性から産業革命の最盛期、オーストリア・ハンガリー帝国の繁栄期の後、第一次世界大戦以降には混乱の時代が続きました。このように中欧のこの地域の社会には常に外圧があったため、個人的にはとても不安定な感情が内在し、何か特別なものを生み出すことが必要であるような切迫感があったそうです。しかしこれこそが科学において、「対立が創造性を育む」ことになったのです。

【ユダヤとの混交】19 世紀のハンガリーではユダヤ人を解放しました。しかしここではユダヤ人は政治や軍隊でキャリアを得る道は開かれなかったため、経済で活躍しました。さらに子息に教育を与えようとするれば、科学か工学を勉強させる他になかったそうです。

【境界を越える寛容】ハンガリーのような小さな時空で異なる文化が共存できる前提条件は「寛容」であり、互いに異なることが批判精神と創造性を結合させる要因であったそうです。教育が旧来の伝統的な技術や規則、法則、境界に限定されていれば、学生は現実が提起する新たな相互作用を認識することは不可能です。しかし逆にもし矛盾する事態に直面することを余儀なくされれば、新たな結合の可能性を探る勇気を持つこととなります（私の経験でも、現代の科学にはその進歩を妨げるような上記の「限定」をしばしば見かけました。これに縛られることなく学際的な結合の可能性を探ることにより、独創的研究が生まれるのでしょうか）。

以上の分析をもとに著者は将来にむけて、「我々の時代は再び創造的な侵入者（すなわち「異星人」）を必要としている」と指摘しています。その理由として、「孤立し極端に専門化されて凍結した構造を崩し融解させ、旧来の差別化志向から解放放たれて初めて、新しい進化への出発が可能になるから。」と記しています。

【第 2 部】

上記の科学者を代表する 20 名の評伝が記されています。すなわち、T. カルマン（流体力学のパイオニア）、J. ウィグナー（原子炉の設計）、E. テラー（水爆の開発）、J. ノイマン（20 世紀最高の頭脳）、P. エルデシュ（放浪の数学者）、A. グローブ（INTEL 中興の祖）、A. セント・ジョルジィ（ビタミン C の発見）、D. ガボー

ル（ホログラフィの開発）などの波乱の人生が詳しく記されています。

【第3部】

まずハンガリーの教育の伝統について解説しています。ハンガリーでは第1部で記した要因とともに、ギムナジウム（高等学校）・システムが「異星人」を生んだとのこと。このシステムでは民主主義的な国では達せられないような知的厳格さの中に学生を曝しました。なお、著者によれば、ギムナジウムの歴史で民主主義的な成功例は1945年以後の日本だそうです。これに対しエリート的な成功例は1890-1930年頃のハンガリーだそうです。次に科学研究を振興するためのエトヴォシュ協会（創設者はR. エトヴォシュ）について解説しています。この協会では現在に至るまで研究情報を相互に交換し、学際的な色彩をもつ学会誌を出版することで科学研究への関心と意欲が高まるよう努力しています。